

ゴルギアスにおけるロゴスと弁論術

—『ヘレネへの賛辞』研究—

中 澤 務

1. はじめに

プロタゴラスと並び称される代表的ソフィスト・ゴルギアスは、弁論術を体系化し、発展させた思想家として名高い¹⁾。彼の活躍した紀元前5世紀から4世紀にかけての古代ギリシャ世界は、民主制の発展の中で、弁論の重要性が急速に増していった時代であり、彼はそのような時代の要請にこたえ、弁論術の教師として、時代をリードしていった。では、ゴルギアスは、その技術の中核にある言葉（ロゴス）について、どのような思想を持っていたのであろうか。

ゴルギアスは、紀元前4世紀の哲学者プラトンによって、哲学的な議論には関心の薄い人物のように描写されている。しかし、エンペドクレスの強い影響下に活動を開始し、『〈あらぬもの〉について、あるいは自然について（περὶ τοῦ μὴ ὄντος ἢ περὶ φύσεως）』という哲学的な内容を持つ書物を書いたゴルギアスが、みずからの活動の中心をなすロゴスの問題について、何の哲学的思想も持っていなかったとは考えにくい。

筆者は、かつて、『〈あらぬもの〉について、あるいは自然について』の第二部および第三部の分析を行ない、そこにエレア派の哲学に対する真剣な哲学的批判が含まれていることを明らかにした²⁾。筆者の分析が正しければ、この作品においてゴルギアスは、当時エレア派を中心に抱かれていた、「人間は、心の外部の实在を客観的に認識することができ、言語とはその認識を他者に伝えるための道具である」という哲学的な認識・言語観を批判している。

では、そのような言語観に対置されるゴルギアス自身の言語観とは、どのよ

うなものなのであろうか。この作品では、徹底した対人論法的な議論がなされているため、その議論の中から、ゴルギアス自身の積極的な思想を読み取るとは難しい³⁾。しかし、われわれは、より後の時代に執筆されたと考えられる『ヘレネへの賛辞 (Ἑλένης ἐγκώμιον)』⁴⁾ (DK82B11) の中に、ゴルギアスのロゴスの思想を見て取ることができる⁵⁾。そこで、この論文では、この作品に焦点を当て、彼のロゴスの思想を明らかにして行きたい。

※

ゴルギアスの著作で、その全体が保存されているものは、『ヘレネへの賛辞』と『パラメデスの弁明 (ὕπερ Παλαμήδους ἀπολογία)』 (DK82B11a) のみである⁶⁾。この二つは、いずれも神話上の悪名高い人物をその悪評から弁護するという、共通の内容を持っている。すなわち、前者においては、トロイアの王子パリスに誘惑されて祖国を出奔し、トロイア戦争の引き金となったスパルタ王妃ヘレネについて、彼女に責任はないことが論証されている。また、後者においては、トロイア戦争において英雄オデュッセウスの恨みを買って、その策略によってトロイアとの内通の罪で告発され、処刑されたパラメデスが登場し、陪審員に向かって、みずからの潔白を主張する自己弁護の演説を行なっている。

これら二人の人物をゴルギアスが取り上げたのには、理由があったと考えられる。すなわち、両者は、その評価が揺れていたのである。とりわけ、ヘレネが非難すべき女性なのか、それとも同情すべき女性なのかは、当時さまざまに議論されていた問題であり、さまざまなかたちで擁護のための議論がなされていた⁷⁾。ゴルギアスもまた、そのような当時の定番の論争を取り上げ、みずからの弁論の技術を駆使して、その擁護の議論を組み立てたのだと考えられる。

では、われわれは、彼の議論の中に、どのようなロゴスの思想を読み取ることができるのであろうか。以下、われわれは、ゴルギアスのテキストを具体的に読み解いていくが、そのためにまず、次節で、全文の日本語訳を提示することにしたい⁸⁾。

2. 『ヘレネへの賛辞』（日本語訳）

凡例

- ・ [1][2]…は、節番号を示す。
- ・ 原文における欠落箇所の推測による補完は〈 〉で括る。
- ・ 原文にはない訳者による補足は〔 〕で括る。
- ・ ゴルギアスの提示する四つの理由を①②③④で示す。

ヘレネへの賛辞

[1] 国家に栄光をもたらすのは、優れた国民である。肉体に栄光をもたらすのは、美しさである。心に栄光をもたらすのは、知恵である。ものに栄光をもたらすのは、優秀さである。言葉に栄光をもたらすのは、真実である。そして、これらとは反対のものが、それぞれに不名誉をもたらすのである。

男性であれ女性であれ、言葉であれ行動であれ、国であれものであれ、それが賞賛に値するものであるなら、賞賛をもってほめたたえるべきであるが、賞賛に値しないものであるなら、非難しなければならない。じっさい、賞賛すべきものを非難することと、非難すべきものを賞賛することは、同じくらいに誤った愚かな所業なのである。

[2] しかるべきことを正しく語る人であるなら、ヘレネを非難する人々に反論しなければならない。この女性について、名高い詩人たちは異口同音に同じ意見を述べ、心を一つにしている。それは、その名前の不吉な響き〔が持つ含意〕と同じものだ。すなわち、その名前は、〔トロイア戦争という〕災難を思い起こさせる原因となっているのである。そこで、わたしは、わたしの話にひとつの筋の通った論証を与えることによって、この悪名高き女性に対する告発を阻止しよう。そして、彼女を非難する人々の言うことが間違いであることを証明し、真実を明らかにして、彼らの無知に終止符を打ちたい。

※

[3] さて、これから論じようとするこの女性は、もって生まれた素質においても、血筋のよさにおいても、男女を問わず一流中の一流である。それは誰の目にも明らかなことだ。じっさい、その母がレダであることは明らかである。また、その父は、ほんとうはゼウス神なのだが、人間のテュンダレオスとも言われている。前者はほんとうに父であるから、そう信じられているが、後者は「自分が父だと」申し立てているだけで、ほんとうの父ではない。そして、後者は最強の男であり、前者は世界の王なのである。

[4] このような親から生まれたから、彼女は神に匹敵する美しさを持った。そして、そのような美しさを持ったから、それは世の中に知れ渡ることとなったのである。きわめてたくさんの男たちが、きわめて強い愛情を、彼女に対して抱いた。そして、大きなことを成し遂げることに大きな誇りを感じる男たちのたくさんの体が、「ヘレネの」一つの体に向かっていくことになった。そのような男たちの中には、莫大な富を持つ者もいたし、古くより続く血筋のよさで評判の高い者もいたし、強い力を持つ者もいたし、知恵の力を手に入れた者もいた。彼らはすべて、勝利への欲望と不屈の名誉欲に突き動かされて、やって来た。

[5] さて、ヘレネを手に入れて欲望を満たした者は誰であり、また、その者がいかなる理由にもとづき、いかなる方法でそれを実現したのかについては、わたしは語らない。なぜなら、すでに知っている人々に、すでに知っている内容を話しても、確信を強める効果こそあれ、楽しみは与えないからである。そこで、この話においては、そのような当時の話は省略する。そして、わたしの言論の最初の部分に進んで、ヘレネがトロイアへ旅立ったのはもっともなことであったと思わせる、いくつかの理由を示していくことにしたい。

※

[6] すなわち、彼女があのようなことをしたのは、①運命の意志と、神々の計画と、必然の定めゆえか、②暴力によって誘拐されたからか、③言葉によって説得されたからか、④〈愛によって征服されたからか〉のいずれかである。

さて、もし最初の理由（①）によるのだとしたら、告発に値するのは告発者のほうである。というのも、神の意志を人間が予見して妨げることなど不可能なのであるから。強者が弱者に妨げられることなど、そもそもない。むしろ、弱者は強いものに支配され導かれるべきものであり、強者が導き弱者が従うべきなのである。そして、力でも知恵でもそれ以外の何でも、神は人間より強いのである。だから、運命と神が理由だと考えるべきだとしたら、ヘレネは悪しき評判から解放されなければならない。

※

[7] では、②彼女が暴力によって誘拐され、不法に暴力を振るわれて、不正に暴行されたのだとしたらどうだろうか。その場合、明らかに、誘拐した男性が、暴行によって不正をなしたのであり、誘拐された女性のほうは、暴行されて不運な目に遭ったのである。このような場合、言葉と法と行為において野蛮な企てをした野蛮な男こそが、言葉においては告発を、法においては名誉剥奪を、行為においては罰を受けるべきである。これに対して、暴力を振るわれて、祖国を奪われ、愛する家族と友人たちから引き離された女性は、悪口を言われるべきではない。むしろ、彼女は哀れみを受けてしかるべきなのである。男性のほうが悪ろしいことをして、女性のほうはその被害を受けた。だから、女性を哀れみ、男性を嫌悪することが正しいのである。

※

[8] また、③言葉が彼女を説得して、彼女の心を欺いたのだとしても、次のように考えれば、彼女を弁護して告発を無効にするのは難しいことではない。言葉は強力な支配者である。その姿は、極めて小さく、極めて見えにくいものであるが、それは神にしかできないようなことをなし遂げる。なぜなら、言葉は恐怖を止め、苦痛を取り除き、喜びを作り出し、哀れみの情を増すことができるからである。以上がほんとうであることを、わたしは証明しよう。

[9] 聴衆の方々に、次のような意見を示してしかるべきだ。わたしは、すべ

ての詩は韻律を伴う言葉だと考え、そう呼んでいる。詩を聞く人々の中には、恐れによる震えと、涙を誘う憐憫と、悲しみに沈む希望が侵入してくる。他人の行為と身体に生じる幸運と不運に対して、心は、言葉の力によって、ある特有の状態に陥るのである。この話はこれくらいにして、別の話に移ることにしよう。

[10] 言葉による靈感に満ちた呪文は、快樂を強め、苦痛を弱めるものとなる。呪文の力は、心の信念と一緒にすることで、魔法によって心を魅了し、説得し、変化させる。この魔法と魔術については、二つの技が発見されている。すなわち、心を惑わせることと、信念を欺くことである。

[11] いかに多くの人々が、いかに多くの人々を、いかに多くの事柄に関して、偽りの話を作り出して説得してきたし、また現に説得しているであろうか。もし、すべての人々が、すべての事柄について、過去の事柄についてはその記憶を、現在の事柄についてはその〈意識〉を、未来の事柄についてはその予見を持っているとしたら、言葉は、〔今あるものと〕同じように、同じようなものとしてあることはなかったであろう。じっさい、現実には、過去の事柄を記憶することも、現在の事柄を探求することも、未来の事柄を予言することも、容易なことではないのだから。それゆえ、たいていの人々は、たいていの事柄について、信念を心の助言者にしている。しかし、信念は滑りやすく、堅固でないから、それを使う者に対して、滑りやすく、堅固でない幸運しかもたらさないのである。

[12] だから、いったいどんな原因が、それを阻止するというのか。すなわち、ヘレネにもまた、賛美の言葉が届いた。そして、そのとき彼女は、正気ではなかったのだから、事情は、暴力的方法で暴力によって強奪される場合と同様なのである。じっさい、説得という手法が導入され、そして、それに抗えないことを理性が知るとき、それは独自の力を発揮する⁹⁾。なぜなら、言葉は、心を説得するものであり、それが心を説得すると、語られたことに従わせ、なされたことに同意させるからである。それゆえ、説得した者が強制したのであるから、説得した男に罪がある。これに対して、説得された女性のほうは、言葉に

よって強制されたのであるから、彼女が悪口を言われるのは間違いなのである。

[13] 言葉に説得が付け加わるとき、それは、望むがままに心のかたちを作り変える。

第一に、天文学者たちの言葉に注目すべきである。天文学者たちは、信念に信念を対立させ、ある信念を取り除いて、別の信念を作り出す。そして、信じられないような不明瞭な事柄を、信念の目に対して、明らかにするのである。

第二に、言葉によってなされる、論理的説得力を競う〔法廷や議会での〕論争¹⁰⁾が挙げられる。そのような論争においては、真実に基づいて語られた言論ではなく、技術に基づいて書かれた言論が、きわめて多くの人々を喜ばせ、説得するのである。

第三に、哲学者たちの論戦が挙げられる。そのような論戦では、すばやい判断が提示されるが、このことは、信念の抱く確信が、いかにたやすく変化するかを示している。

[14] 言葉の力が心の構造^{タクシス}に対して持つ関係は、薬の組成^{タクシス}が体のあり方に対して持つ関係と同じである。異なる薬は、体から、異なる体液を排出させる。ある薬は病気を停止させるが、ある薬は生命機能を停止させる。言葉もこれと同じように、ある言葉は苦しみをもたらし、ある言葉は喜びをもたらし、ある言葉は恐れをもたらし、ある言葉は聴衆を奮い立たせる。そして、ある言葉は、何らかの悪しき説得によって、心に薬を投与して魔法をかけるのである。

[15] もし彼女が言葉によって説得されたのだとしたら、彼女は不正をしたのではなく、運が悪かったのだという点については、以上で語られた。

※

④わたしは続く第四の言論において、第四の理由について検討することにしよう。もし、これらすべてのことをもたらしたものが愛欲であったとしたら、起こったと言われる間違いに対する告発を回避することは難しくはない。

われわれが見る対象は、われわれが望むとおりのあり方を持つのではなく、それぞれ独自のあり方を持っている。そして、視覚を通して、心は、そ

の特性の内に型押しされるのである。

[16] たとえば、敵の一团が、敵たちに対する敵対的な対立を、青銅と鉄でできた、防御と攻撃のための武器で整えたとしよう。そして、それを視覚が眺めたとする。するとたちまち、視覚は動揺して、心をかき乱す。その結果として、人々はしばしば、危険がすぐそこに迫っていると思い、狼狽して逃げ出すのである。このようなとき、法をめぐる真実が、視覚のもたらす恐怖心によって、強く現れることになる。すなわち、法によって立派だと判断されていても、正義によってよいことがもたらされるとしても、視覚が生じると、それを受け入れさせてしまうのである。

[17] 恐ろしいものを見ただけで、それまで持っていた思慮を失ってしまう人もいる。恐怖心が思考を消し去り、追い出してしまうのである。〔それによって〕たくさんの人々が、とりこし苦勞とか、恐ろしい病気とか、治療困難な狂気に陥った。視覚が、見られたもののイメージを思考の中に刻み込んでしまうのだ。そして、そのような恐ろしいイメージの多くが、そこに留まる。そして、留まったイメージは、語られた言葉と同じようなものなのである。

[18] また、画家はたくさん色や形を使って、ついには、一つの形姿を作り出す。このとき、画家は、〔見る人の〕目を楽しませている。人間の像の製作や、神の像の製作は、快い病を目にもたらす。このように、本性的に、あるものは視覚に苦痛を引き起こし、あるものは熱望を引き起こす。そして、たくさんものが、たくさんの人々に、たくさん物や体に対する欲望と欲求を作り出すのである。

[19] それゆえ、ヘレネの目がアレクサンドロス¹¹⁾の体を快く思い、熱心な愛と闘争心を彼女の心にもたらしたのだとしても、何を驚くことがあろうか。

もし愛が神であり、神々の神的な力を持っているとしたら、どうして、より弱い人間が、神に抵抗して自分を守ることができようか。

また、もし愛が人間の病気であり、心の愚かさなのだとしたら、それは過誤として非難されるべきではなく、むしろ、不運と見なされるべきである。なぜなら、それは来たるべくしてやって来たのであり、また、判断の決定によって

ではなく、心が罫にはまったことによって、やって来たのであり、さらには、技術が準備した結果としてではなく、抵抗しがたい愛の力によってやって来たのであるから。

※

[20] 以上のように、どうして、ヘレネへの非難が正当だなどと考える必要があるだろうか。彼女が愛に捕われたのだとしても、言葉によって説得されたのだとしても、暴力によって誘拐されたのだとしても、あるいは、神の必然によって強いられ、あのようなことをしてしまったのだとしても、すべての可能性において、彼女は告発を逃れるのである。

[21] わたしは、以上の言論によって、この女性の悪評を取り除き、言論の冒頭で自分が立てた法を遵守した¹²⁾。わたしは、不当な告発を止めさせ、告発者の無知に終止符を打とうとした。わたしは、この言論を、一方ではヘレネへの賛辞として、他方では自分の楽しみとして、書こうと欲した。

3. 『ヘレネへの賛辞』の特徴と執筆目的

それでは、以下、テキストの考察を進めていこう。ゴルギアスによるヘレネ擁護の構造は、単純である。すなわち、彼は、まえおきを述べた後([1]-[5])、ヘレネがトロイアに出奔した理由として四つの可能性を列挙し、その後、それぞれの可能性を順次取り上げ、そのいずれだったとしても、ヘレネには責任がないと論じていくのである。さらに、ヘレネに責任がないとするゴルギアスの論拠も単純なものだといえる。すなわち、それは、いずれの可能性においても、ヘレネがそれを自力で回避するのは不可能であったという論拠であり、これは①～④すべての可能性に共通している。

四つの可能性のうち、①と②については、ゴルギアスの議論は非常に短い。①の可能性については、彼は、そのような神の力は極めて強力であり、力の弱い人間がそれを予見して妨げることなど不可能だという理由で、ヘレネの責任を回避しようとしている。また、暴力によって誘拐されたという②の可能性に

ついても、暴力を振るった男性（パリス）のほうに責任があり、暴力を振るわれたヘレネのほうはむしろ被害者であり、哀れみを受けるべきだと主張している。このように、①②の可能性に対するゴルギアスの議論は、回避不可能な力によって強制された非自発的な行動には責任を問うことができないという常識的な理由に基づいており、常識的に妥当で、受け入れうる理由であると評価できる¹³⁾。

問題は、③と④である。これらについても、ゴルギアスは、①②と同様に、ヘレネは言葉の力にも愛(エロス)の力にも抗うことができなかつたと主張し、さまざまな理由を持ち出して、言葉と愛の力の強さを説明していく。しかし、常識的には、言葉や愛の力は、本人の意志で従わないことも可能な力であり、それに抗えずに従ってしまったことは、むしろ本人の責任を示すものといえるのである。その意味で、③④の議論は、常識に反する議論(パラドクソロギア)であるといえる。

※

おそらくゴルギアスは、自分の言論能力を誇示するために、このような常識に反する議論を組み立てたのであろう¹⁴⁾。しかし、われわれは、これが彼の通常の弁論のスタイルであつたと考えるべきではない。実際、ゴルギアスの通常の弁論が、ここで彼が展開しているような内容であつたら、彼の弁論術が裁判や議会で有効な技術として、広く支持されることはなかつたであろう。

実際のゴルギアスの演説は、聴衆の反応を考慮に入れ、誰が聞いても納得できるような常識的な論点で組み立てられていたと考えられる。この点は、『パラメデスの弁明』を見れば明らかである。というのも、この作品は、神話上の人物を不当な非難から擁護するという共通の目的を持つが、具体的な弁護の内容はまったく異なり、そこには、『ヘレネへの賛辞』で感じられるような常識に反する側面は見られないからである。

『パラメデスの弁明』は、ゴルギアスによる直接の弁護ではなく、被告のパラメデスが、原告であるオデュッセウスを相手に、陪審員の前で自己弁護の演

説をするという筋立てになっている。パラメデスは、通常の裁判での弁明の手順に従い、まず陪審員への呼びかけを行った後、自分が敵方のトロイアと内通することは不可能であったことを、以下のように論証していく。

彼はまず、(I)自分が敵と内通することはないことを、(1)敵と内通しようにも言葉が通じないこと、(2)敵との信頼関係を継続させることは不可能であること、(3)敵を城壁内に手引きすることは不可能であること、の三つの理由を提示して論証した後、次に、(II)たとえ内通が可能であったとしても、彼にはその動機がないことを、(1)内通によって僭主になることは不可能であること、(2)裕福な彼には富と財を求める理由がないこと、(3)内通によっては名誉を得られないこと、(4)内通によっては身の安全は図れないこと、(5)味方の利益を得るためではありえないこと、(6)内通によって回避すべき恐怖や苦痛や危険を持っていないこと、という6つの理由を提示して論証していく。さらにその後、もし自分が敵と内通したとしたら、自分のその後の生が生きるに値しないものになることを強調する。

以上の一連の論証が終わると、次に彼は原告に対する質問を行ない、原告の主張内容が論理的に破綻していることを明らかにしていく。こうして一連の弁明を行った後、彼は、今度は陪審員に向かって、自分の潔白を直接訴えかけ、演説を終える。

以上の『パラメデスの弁明』の内容は、『ヘレネへの賛辞』に比較すると、大きく異なっている。

まず、なによりの違いは、『ヘレネへの賛辞』が単純な論拠に基づく単純な構造の議論であるのに対して、『パラメデスの弁明』は、複雑な構造を持ち、考えるあらゆる理由を論理的に整理して提示している点であろう。さらに、論拠の具体的な内容についても、『ヘレネへの賛辞』が反常識的なものを含んでいるのに対して、『パラメデスの弁明』は、すべてが常識にかなっている。

さらに、もう一点、指摘しておくべき重要な違いがある。『パラメデスの弁明』の場合、弁明は、パラメデス自身の個人的な事情に即して行われている。すなわち、彼の持ち出す論拠は、誰に対してでも普遍的に成立する論拠(たとえば、

(I)(3)) もあるが、他方、彼にしか成り立たない論拠（たとえば、(II)(2)) も含まれている。しかし、『ヘレネへの賛辞』の場合、ゴルギアスの挙げる①～④の理由は、すべての人間にあてはまる普遍的な理由なのである。つまり、『ヘレネへの賛辞』での弁護は、当事者がヘレネ本人でなくても、誰に対しても成り立ってしまうのである¹⁵⁾。

以上のように、両作品は、表面的な類似性とは裏腹に、その議論の内実は、本質的に異なっているといえる。われわれは、両作品を、異なる執筆目的を持った作品と考えるべきであろう¹⁶⁾。では、それぞれの目的は何だったのだろうか。

『パラメデスの弁明』については、それが模擬法廷演説であることは、明らかであるように思われる。それは、法廷での弁明の形式を模したものであり、その内容も、陪審員たちの常識に訴えかけ、彼らを説得することをもくろんでいる。おそらく、ゴルギアスは、この作品を、自分の技術の宣伝のための見本としてか、あるいは、弁論術教育のための教材として利用したのであろう。

これに対して、『ヘレネへの賛辞』には、『パラメデスの弁明』のような常識的な妥当性は薄い。ここから、多くの研究者は、この作品は真面目な意図で書かれたものではないと考えてきた。本作の最後で ([21])、ゴルギアスは、この作品を自分の「楽しみ (παίγνιον)」として書いたと述べている。つまり、彼はこの作品を一つのジョークとして書いたのであり、彼自身には、真面目な意図などまったくなかったのだというわけである¹⁷⁾。

※

このような見方に対して、彼の議論に真面目な内容を読み取ろうとする研究者たちは、「弁論術の擁護」という目的を指摘してきた。すなわち、ゴルギアスが『ヘレネへの賛辞』で本当に意図していたのは、実はヘレネを擁護することではなく、みずからの技術である弁論術を正当化し、擁護することだったと考えるのである¹⁸⁾。とりわけ、③の議論は、ロゴスがいかに強力で、人間の心を支配できるかをめぐる主張であり、これは弁論術のロゴスの強力さに対する

賞賛にほかならないとされる。

筆者もこの解釈を支持したい¹⁹⁾。というのも、このような隠れた目的を想定することで、これまで指摘したさまざまな疑問点を解消できるからである。

まず第一に、この作品の表題が『ヘレネへの賛辞』である点である²⁰⁾。この作品名については、当時から疑問が提示されており、実際、彼の弟子のイソクラテスは、ゴルギアスを批判し、彼が実際に書いたのは賛美ではなく弁明であると述べている²¹⁾。これと同様の指摘は現代でもなされており、たとえば MacDowell は、この作品は『ヘレネの弁護』とするほうが適切だと述べている²²⁾。しかし、もしゴルギアスが、本当にそのような意図を持っていたのであれば、そもそも、彼はどのようにして意図を誤解されるような発言をしたのであろうか。これに対して、もしこの作品が、弁論術の擁護と賞賛のために書かれたものであるとしたら、ヘレネは表題の通り、賞賛の対象になりうるのである。なぜなら、彼女は弁論術のロゴスの力に極めて従順な女性であり、その心のありかたは、まさに弁論術が理想とする人間像を具現しているからである。

第二に、常識的とはいえない内容の議論が展開されている点である。もしこれがゴルギアスの見解を示したものであり、そこでは、ロゴスとそれに操作される人間の心をめぐる、彼自身の独自の思想が表明されているのだとしたら、そこでの彼の主張の内容が常識から離反するものであっても、何の問題もないであろう。

第三に、本作での理由がすべての人間に普遍化されるという、すでに指摘した特徴に関してである。これについても、この作品が、ヘレネという一個人を弁護するためのものではなく、むしろ、弁論術が人間全般に対して持つ力を示そうとしたものであるとしたら、当然の特徴であろう。

第四に、本作が「楽しみ」と言われている点である。ここで本作の議論が「楽しみ」と言われているのは、それが不真面目なジョークだからではなく、ゴルギアス自身の思想の表明、すなわち彼個人の思想的プロパガンダだからであり、しかも、ヘレネの弁護という表面上の目的の背後にまったく別の目的を隠すという、お遊び的要素の強いものだったからである²³⁾。その意味で、議論の最後

に述べられる、「わたしは、この言論を、一方ではヘレネへの賛辞として、他方では自分の楽しみとして、書こうと欲した」という一文は、深い意味を持っている。なぜなら、そこで彼は、「賛辞」と「楽しみ」という、本作の真意を理解するための二つの鍵概念を並べて提示し、読者になぞかけをしていると考えられるからである。

※

以上で、『ヘレネへの賛辞』の執筆目的が明らかとなった。では、ゴルギアスは、そのような目的のもとに、どのように弁論術の力を提示しようとしているのであろうか。また、その背後に、彼自身のどのような人間観が提示されているのであろうか。以下、この点を詳しく考察していこう。

4. ギルギアスにおける心の概念

われわれは、ギルギアスのロゴス概念を分析していく前に、その背後にある彼の人間理解がどのようなものであったのかを明らかにしておく必要がある。なぜなら、彼のロゴス概念は、それに従う人間の心のありかたを前提として成り立っているからである。そこでまず、③④の議論を中心に、ギルギアスが人間の心をどのようなものと捉えているのかを詳しく考察していくことにしよう。

※

まず指摘すべきは、ギルギアスにおいて、心は、ホメロスにおけるような、ほとんど実体を持たない影のようなものではなく、一定の本性的な構造を持っているという点である。それは、身体のあり方と類比的に理解されている。[14]において、ギルギアスは、「言葉の力が心の構造^{タクシス}に対して持つ関係は、薬の組成^{タクシス}が体のあり方に対して持つ関係と同じである」と主張している。体の「あり方」の原語は「ピュシス（本性・自然）」であり、ギルギアスは、人間の身体が一つのピュシスとして自然的なあり方を持つことを認めているが、それと同

様のあり方を、心も持つと述べているのである。

次に指摘すべきは、心は、身体と同様に、外的な作用の影響を受けて、そのあり方を変化させるという点である。すなわち、薬は身体に働きかけ、体液の排出を促したり、病気の治療を行ったり、場合によっては生命機能を停止させてしまう。それと同様に、言葉は、心に苦しみや喜びや恐れや興奮をもたらすのである。このように、心は、身体がさまざまな状態に変化するのと同様に、さまざまな感情を発生させて変化するものと捉えられている²⁴⁾。その際注目すべきは、心の受動性である。すなわち、心は徹底的に受動的なものとして捉えられ、外から心に働きかける言葉という能動的な力によって、その構造を容易に変化させられるようなものとして捉えられているのである。

ゴルギアスは、このような変化において視覚が果たす役割を強調している。彼によれば、視覚は、心が持つさまざまな特性の内に型を押し付ける（[15]）。すなわち、敵の一団を目撃した人が、それまでの心のあり方を動揺させ、恐怖心に捉われて逃げ出すように、心は、その時々視覚に影響されてしまう。その影響力は、法（ノモス）という社会的規範よりもはるかに強いものであり、視覚的経験の強い影響があるときには、法の力は無力化してしまうのである（[16]）。

このような視覚の影響は一時的なものではなく、心に蓄積され、その構造を変化させていく。すなわち、たとえば、恐ろしいものを見るという経験が続けた者が、病気や狂気に陥ってしまうように、視覚は、そのイメージを思考の中に刻み込み、心に蓄積していくのである（[17]）。

このように、ゴルギアスにおいては、心は、視覚という感覚的経験を通して、具体的な性質を形成するとともに、その時々視覚的経験の強い影響の下で、行為のあり方を決定されるのであるが、そのような強い影響を心に与えるものは、視覚だけではない。彼は、〔視覚的経験を通して〕「留まったイメージは、語られた言葉と同じようなもの」だと述べている（[17]）。すなわち、言葉もまた、視覚と同じように心に影響を与え、そのあり方を変化させていくものとして捉えられているのである。この視覚と言葉の同一視は、ゴルギアスにおけ

るロゴスが、理性ではなく、感覚の側に属するものであることを示している。

以上のように、心は、視覚や言葉の影響を受け、そのあり方を変化させるが、その変化は心に留まらず、さらに身体にまで影響を及ぼしていく。[9]で述べられているように、詩の言葉は、心に作用してさまざまな感情を引き起こすが、それは身体に影響を与え、恐怖心による震えを作り出す。また、視覚イメージは、病気を引き起こす([17])。このように、ゴルギアスにおいては、心と身体は密接に連続しており、共振現象を引き起こすのである。

※

以上、われわれは、ゴルギアスにおける心の理解の特徴を考察した。心は、身体と同様に、一定の本性と構造を有しているが、外部の力によって容易にその状態を変化させる受動的なものである。心は、外部からの言葉の力や、視覚のイメージによって、そのあり方を変えられ、さらに、信念の変化による感情の発生を介して、行為を促されるのである。

Segal は、ゴルギアスの議論から、特徴的な心の理論が読み取れると主張した²⁵⁾。彼の解釈では、ゴルギアスの心の理解は生理学的なものであり、彼は心を物質的なものとして理解している。そして、同じ物質的な働きとして、心と身体は相互に依存的であり、その境界線は曖昧であるという。

彼の解釈は魅力的である。しかし、テキストからこのような理論が明確に読み取れるとは思われない。ゴルギアスは、あくまでも心と身体を類比的に捉えているだけであり、心が身体と同様に物質的なものであると明言しているわけではないからである。確かに、Segal が主張するように、この時代に、デモクリトスは唯物論的な心の理解を提示しており、その理論をゴルギアスが知っていた可能性はある。しかし、原子論を前提としないゴルギアスが、デモクリトスと同様の心の理解をしていたとは思われない。むしろ、ゴルギアスにとって重要なのは、心が外的な力によって形成され、また、その力によって受動的に動かされるという事実であった。そして、その事実さえ認められれば、彼のロゴスの理論は成立するのである。

5. ロゴスと説得

以上のような心の概念を前提して、ゴルギアスはどのようなロゴスの理論を提示しているのでしょうか。すでに確認したように、心は言葉が持つ力によって変化していく。では、その変化は、どのように引き起こされるのでしょうか。

ゴルギアスはまず、詩と（[9]）呪文（[10]）を取り上げ、これらによって言葉の力を説明しようとする。

彼はまず、詩を「韻律を伴う言葉」と定義し、それが人々に与える効果を指摘する。すなわち、「詩を聞く人々の中には、恐れによる震えと、涙を誘う憐憫と、悲しみに沈む希望が進入してくる」。そして、「他人の行為と身体に生じる幸運と不運に対して、心は、言葉の力によって、ある特有の状態に陥るのである」。ここでゴルギアスは、ホメロスの叙事詩を念頭にしているように思われる。すなわち、そこでは、登場人物たちに降りかかるさまざまな事件が描かれ、聴衆はその言葉を聞いて、恐怖や憐憫といった強い感情的な状態に陥るのであるが、その際、詩的な韻律が聴衆の心を感覚的に揺り動かし、その感動を深めるのである。

次に彼は、「言葉による靈感に満ちた呪文（[10]）」を取り上げ、それが「快楽を強め、苦痛を弱める」効果を持つと主張する。すなわち、「呪文の力は、心の信念と一緒にすることで、魔法によって心を魅了し、説得し、変化させる」のである。これは、おそらく、宗教的な儀式における呪文の朗誦のことを述べていると思われる。そのような呪文の力は、心に抱かれる信念と一緒にすることで、魔法の力を獲得する。そして、心を魅了し、説得して、変化させてしまうのである。ここで、呪文の力が心の信念と一緒にするとは、呪文が持つ詩的な韻律や宗教的な雰囲気、その呪文の内容（信念）と一体化し、相互に効果を強め合うということであるように思われる。

以上のように、詩も呪文も、それが心に対して働く構造は、基本的に同じものだということができる。すなわち、言葉は、韻律などの装飾的な要素と、その内容からなっているが、それぞれが単独で心に働きかけるのではなく、両者

が一体となることで、聞き手の心に強い感情を引き起こすことができるのである。

われわれは、このゴルギアスの分析は、単に詩や宗教的呪文のような特殊な場合だけでなく、弁論一般にも当てはまることに注意すべきである。ゴルギアスにおいては、詩と散文の間の境界線は曖昧であり²⁶⁾、彼の弁論術の理論には、詩の技法が影響を与えている。また、宗教的な呪文についても、ゴルギアスは、言葉全般にこのような魔法というべき力があると考えていたと思われる²⁷⁾。

※

以上のように、言葉は心を動かす特別な力を持っているが、それを彼は、「説得（ペイトー）」と呼んでいる。この力が言葉に加わるとき、言葉は「望むがままに心のかたちを作り変える」（[13]）。このとき、かたちを作り変えられる具体的な心の内容は「信念（ドクサ）」と呼ばれている。

ゴルギアスによれば、人間は、過去・現在・未来に渡る完全な知を持つことはできない。なぜなら、過去の事柄の記憶も、現在の事柄の探求も、未来の事柄の予言も、人間にとっては容易なことではないからである。それゆえ、人間は、たいていの事柄については、信念を頼りにしなければならないのであるが、信念は滑りやすく、堅固でないのである（[11]）。

このように、ゴルギアスのロゴスの理論は、人間の知的認識の弱さと限界を前提にして成り立っているが、人間の知に対するこのような姿勢は、『〈あらぬもの〉について、あるいは自然について』での彼の哲学的立場と合致するものであり、ゴルギアスが一貫して抱いていた立場であったと考えることができる。彼の弁論術の理論的正当化は、このような彼独特の認識論的立場に基づいているのである。

さて、このような人間の知的限界ゆえに、人間は説得によって生まれる信念に頼らざるをえない。ところが、信念は、その根拠付けの弱さゆえに、言葉による説得によってたやすく揺らぎ、変化して行ってしまう。ゴルギアスは、そのような信念の移ろいやすさを、三つの例で説明している。第一は、天文学者

たちの言葉である。この例が取り上げられたのは、当時の天文学が、乏しい経験的データしかないにも関わらず、宇宙の真の姿を解き明かそうとする学問だったからであろう。それは、十分な経験的根拠がないにも関わらず、さまざまな理論を提唱して、合理的な宇宙の説明をしようとする。それゆえ、天文学の論争は、信念と信念の対立なのであり、人々に、容易に別の信念を抱かせることができるのである。第二は、「論理的説得力を競う論争」である。これが何を意味するものかは必ずしも明確ではないが、おそらくは、法廷や議会における論争が想定されているように思われる。そのような論争においては、真実を提示するよりも、弁論の技術によって美しく組み立てられた話をするほうが聴衆の心に訴えかけ、より多くの人々を説得できるのである²⁸⁾。第三は、哲学者たちの論戦である。これについても、どのような事態を考えればよいのか明確ではないが、おそらく、互いの応酬の中で、意見が覆されたり、新たな意見が提示されたりするような事態を想定しているのであろう。

このように、ゴルギアスの想定する知の限界は、あらゆる分野に成立するものであり、いかに高度な知的分野であっても、成立するものだといえる。説得によって信念を作り出していくということが、人間の知の本質なのであり、それを超えた知のあり方を、人間は持たないのである。

※

ゴルギアスによれば、このような言葉の本質は、「信念を欺くこと」([10])である。この「欺き（アパテー、アパテーマ）」という概念は、ゴルギアスの言語理解の根幹にある概念であるが、言語を欺きとするゴルギアスの立場は、虚偽で相手を欺くことを認める非倫理的なものとして、批判を受けてきた。しかし、このような理解は、必ずしも正しいものではない。そこで、彼のアパテーの理論について、詳しく考察しておくことにしたい。

アパテーとは、そもそも「道を逸らせる」という意味であり、ある者が、それとは知らずに、自分の思考の道筋を逸らされることを指す言葉である²⁹⁾。もちろん、悪意によって間違った方向に逸らされるのが普通であるから、通常は、

意図的に虚偽を信じ込まされるという意味を持つ。しかし、この言葉自体は中立的であり、必然的に否定的な含意を持つわけではない。なぜなら、当事者が、より望ましい方向に誘導されることもありうるからである。このような意味でのアパテーについては、DK82B23で以下のように語られている。

悲劇が繁栄し、広く知れ渡るようになった。それは、当時の人々にとって、聞くにも見るにも、すばらしいものであった。すなわち、悲劇は、神話の筋立てと〔登場人物の〕受難を使って、欺きを作り出したのである。これについて、ゴルギアスはこう述べている。「欺く者は、欺かない者よりも正しい。そして、欺かれる者は、欺かれない者よりも賢い。」欺く者のほうが正しいのは、意図したことをなしとげるからであり、欺かれる者のほうが賢いのは、無感覚でないものは言葉の快楽に魅了されやすいからである。

(プルタルコス『アテナイ人の栄光について』348c)

これは悲劇をめぐるプルタルコスの発言であり、彼は悲劇におけるアパテーについて語っている。彼によれば、悲劇は、ミュートスとパトスによって、アパテーを作り出すという。これは、演劇の虚構性と、それによって生まれるリアリティーについて述べたものだと考えることができる。たとえば『オイディプス王』では、俳優自身がオイディプス王ではないし、また、彼は実際に目を突いて失明するわけでもない。しかし、観客は、俳優とその演技を、見たままに理解するのではなく、オイディプスの身に起こった悲劇として見、そこにリアリティーを感じるのである。すなわち、演劇のリアリティーが成立するためには、観客が、見たままの事実から意識を逸らされ、そこにはないはずのものを見るように、操作されなければならない。

さて、このような演劇におけるアパテーに関して、ゴルギアスは、「欺く者は、欺かない者よりも正しい。そして、欺かれる者は、欺かれない者よりも賢い」と述べたと証言されている。これはどんな意味なのであろうか。プルタルコスの説明を見てみよう。欺く者が正しいといえるのは、意図したことをなしとげるからであると説明されている。この場合の欺く者とは、悲劇の作者だと考えられる。彼が悲劇を作る意図とは、観客を感動させることであろう。それゆえ、

アパテーによってこの意図をなしとげられる者のほうが、それができない者（すなわち、観客を感動させることのできない無能な作者）よりも正しいのだということになる。また、欺かれる者とは、悲劇に感動する観客のことだと考えられる。そのような者は、欺かれない者（すなわち、悲劇に感動できない者）よりも賢いとされるが、その理由は、「無感覚でないものは言葉の快楽に魅了されやすいから」である。感受性の高い観客は、台詞によってさまざまな感情が引き起こされ、それによって彼は大きな感動を得ることができる。つまり、悲劇の鑑賞においては、そのような感受性を持ち、悲劇作家によるさまざまな操作に従順に身を任せられる観客のほうが、より賢いのである。

以上のように、悲劇におけるアパテーは、まさに演劇に本質的な要素なのであり、それが働くことによって、演劇は、その本来の機能を果たすことができるのである。

※

当時、このようなアパテー概念が存在していたことは、『ディッソイ・ロゴイ』（DK90）からも伺うことができる。この文書の第3巻で、作者は〈正しい〉と〈不正〉をめぐる議論を展開しており、そのなかで、不正（すなわち嘘をつくことや欺くこと）が正しいと見なされうるような事例を挙げている。以下の発言は、そのような正しい欺きの例として言及されているものである。

次に、さまざまな技術、とりわけ詩作に目を向けることにしよう。悲劇の制作や、絵画の制作においては、真実に似たものを作ることによって大多数の人々を欺く者が、最も優れている。

（『ディッソイ・ロゴイ』3.10）

ここでは、先の DK82B23における悲劇のほかに、絵画が例として挙げられている。絵画がいかなる意味でアパテーを作り出すのかについては、悲劇の例から類推することができる。すなわち、絵画もまた、描かれたものを、あたかも実際の現物であるかのように感じさせることのできるものが優れた絵画なの

である。『ディッソイ・ロゴイ』の作者は、これを「真実に似たものを作ることによって大多数の人々を欺く者」と表現しているが、まさにそのようなかたちで人々を欺くという機能が、悲劇と絵画の本質なのである。

以上、われわれはアパテーの意味について考察してきたが、われわれは、『ヘレネへの賛辞』におけるアパテーも、以上と同じものだと考えることができる。

すでに見たように、ゴルギアスにとって、心の外にある実在は不確かなものであり、心はそれを把握することができない。このような彼の認識論的前提は、アパテーを言葉の本質的な機能にする³⁰⁾。なぜなら、このような状況において、言葉がなすべき仕事は、言葉独自の力によって信念を作り出していくことであるが、そのような信念の創出は、必然的に、思考の道筋の操作を伴うからである。そして、ゴルギアスにとって重要なのは、この言葉のアパテー機能をいかに有効に活用し、より適切なアパテーを聴衆に作り出していくかということだったと考えられる。

※

以上、われわれは、ゴルギアスのロゴス概念を明らかにした。それは、Rosenmeyer が指摘しているように、紀元前四世紀のプラトンやアリストテレスにおけるロゴス概念とは、本質的に異なるものだといえる³¹⁾。彼らのロゴス概念は、言葉と実在の一義的な対応関係を想定するエレア派のロゴス概念を引き継いでいる。しかし、ゴルギアスのロゴス概念は、むしろ、そのようなエレア派のロゴス概念への批判から生まれたものであり³²⁾、ロゴスを生成する世界と関連づけ、本質的に曖昧さを持つものとして捉えるヘラクレイトスのロゴス概念に近いのである。

さらに、このようなゴルギアスのロゴス概念は、彼における真理概念の特殊性をももたらすように思われる。ゴルギアスは、[1]において、「言葉に栄光をもたらすのは、真実である」と述べ、[2]では、ヘレネを非難する者たちの誤りを明らかにして、真実を明らかにすると宣言している。このようなゴルギアスの発言は、彼の立場と矛盾したものと解されることが多いが、ここで語られ

ている「真実」が、彼の批判する哲学的な意味での真実ではなく、弁論術によって達成される弁論術的な真実なのだとしたら、彼の発言に矛盾はないのである³³⁾。

6. 自由意志と責任

以上、われわれは、『ヘレネへの賛辞』におけるゴルギアスのロゴス概念を検討してきた。それは、人間の心を徹底的に受動的なものと捉える彼独自の立場に依拠するものであったが、このような彼の心の概念は、自由意志と責任の問題を引き起こすことになる。この問題が本格的に議論されるのは、もっと時代が下ってからであるが、Barnesが指摘するように、ゴルギアスの理論が自由意志の問題を含意していることは疑いえない³⁴⁾。そこで、最後にこの問題を考察し、それがゴルギアスの弁論術の根幹に触れる倫理的問題を引き起こすことを指摘したい。

ゴルギアスの理論では、人間の心は受動的なものであり、単に暴力だけでなく、言葉や愛（エロス）のような情念によって、たやすく動かされるものである。ゴルギアスは、このような心の受動性を根拠に、ヘレネには責任はないと主張している。しかし、もしそのように、人間の心が外的環境に対して能動性を持たないのであれば、人間にはそもそも自律的に行動する力、つまり自由が存在せず、それゆえ、人間にはいかなる責任も問うことができないことになる。ゴルギアスは、人間とはこのような存在であり、人間には責任は成立しないと言いたいのであろうか。

この点に関して、Saundersは、次のような二つの解釈の可能性を提示している³⁵⁾。

- (a) ギルギアスは、外的な力の強さに比較したときの、心の力の弱さを指摘しているに過ぎず、心に自由がないとは言っていない。ギルギアスは、教育などによって、人間の心は強化できると考えている。

- (b) ゴルギアスは、いくらそのような強化を施したとしても、人間の心は原理的に自由を持たないと考えている。

これについて、Saunders 自身は(a)を支持しているが、それは不可能だと思う。なぜなら、人間が外的な力に操作されない自律的な力を獲得できるのだとしたら、人間は、言葉による支配から脱することができることになってしまうが、それは、ゴルギアスの理論そのものを崩壊させてしまうからである。つまり、ゴルギアスのロゴスの理論が成立し、弁論術が有効な技術として存立するためには、ゴルギアスは(b)の立場を取らなければならないのである。このように、ゴルギアスのロゴスの理論は、原理的に、人間の自律的な意志を否定するものだと考えられる。

※

以上のように、ゴルギアスのロゴスの理論は、人間の自由意志を否定する可能性を持っている。ここから、われわれは、ゴルギアスにおいてはもはや倫理的な問題は存在せず、彼の理論の枠組では責任の問題は放棄されているのだと言いたくなる。なぜなら、言葉による操作を受ける側の人間にとって、みずからの行為の正邪を自律的に判断する余地がない以上、その行動が正しいか否かを問うことは、意味がないからである。

それでは、ヘレネの取った悪しき行動の責任は、もはや誰にも問えないものなのであろうか。そうではない。なぜなら、彼の説明の枠組においては、ヘレネにそのような行動を強制した原因が存在するからである。たとえば、②について、彼は、暴力によって誘拐した側に責任があると明言しているし ([7]), ③については、言葉で説得した側に罪を帰している ([12])³⁶⁾。

ゴルギアスの理論では、心を操作し強制する側は、操作される側とはまったく異なる存在である。それは、操作する力を持つ特権的な存在であり、[6]で述べられているような、弱者を導く強者なのである。そして、そのような存在であるがゆえに、操作する側には、操作される側が取った行動の真の原因とし

て、責任が帰されることになるのである。

このような強者として、何よりも弁論家が念頭に置かれていることは明らかである。すると、当然、弁論家にも、言葉によって操作された人の取った行動への責任が帰されることになるはずである。しかし、本作の中で、ゴルギアスは、このような弁論家の責任については、何一つ言及をしていない。そして、この点こそ、ゴルギアスが敢えて曖昧なままにして、素通りしようとしたことではないかと思われるのである。

プラトンは、この点を、『ゴルギアス』の中で鋭く突いているように思われる。そこで、ソクラテスは、弁論家は正義の知識を持ちうるのかとゴルギアスに問う。ゴルギアスは、弁論家は、正・不正、美・醜、善・悪などについての知識も持っており、もしそれを知らないのであれば、自分が教えることができると述べている(459c-460a)。この発言は、結局、弟子のポロスによって撤回され、ゴルギアスは単にそれを否定すると気まずいから、そう認めたに過ぎないのだとされることになる。

しかし、実際のゴルギアスは、どうであったろうか。彼は、弁論術の教師として、弁論術が人々を真実に導き、正義を実現しうることを、素朴に認めていたと考えるのが妥当であると思われる³⁷⁾。そうだとしたら、『ゴルギアス』におけるプラトンの弁論術批判は、ゴルギアスの理論があえて無視して通り過ぎようとした問題を暴き出していることになる。プラトンの投げかけた問題は、ゴルギアスの理論に内在する本質的な問題だったのである³⁸⁾。

文献表

- Adkins, A. W. H., 'Form and Content in Gorgias' *Helen and Palamedes: Rhetoric, Philosophy, Inconsistency and Invalid Argument in Some Greek Thinkers*, in *Essays in Ancient Greek Philosophy vol.2*, J. P. Anton (ed.), SUNY, 1983, 107-128.
- Barnes, J., *The Presocratic Philosophers*, Revised edition, Routledge & Kegan Paul, 1982.
- Buchheim, T., *Gorgias von Leontinoi: Reden, Fragmente und Testimonien*, Felix Meiner, 2012.
- Duncan, T. S., 'Gorgias' Theories of Art', *Classical Journal* 33(1938), 402-415.
- Guthrie, W. K. C., *The Sophists*, Cambridge U. P., 1971.

- Immisch, O., *Gorgiae Helena*, De Gruyter, 1927.
- Jarratt, S. C., *Rereading Sophists: Classical Rhetoric Refigured*, Southern Illinois U. P., 1998.
- MacDowell, D. M., *Gorgias Encomium of Helen*, Bristol Classical Press, 1982.
- McComisky, B., *Gorgias and the New Sophistic Rhetoric*, Southern Illinois U. P., 2002.
- Poulakos, J., 'Gorgias' *Encomium to Helen* and the Defense of Rhetoric', *Rhetorica* 1(1983), 1-16.
- Romilly, J. de, *Magic and Rhetoric in Ancient Greece*, Harvard U. P., 1975.
- Rosenmeyer, T. G., 'Gorgias, Aeschylus, and *Apatē*', *American Journal of Philology* 76(1955), 225-260.
- Saunders, T. J., 'Gorgias' Psychology in the History of the Free-Will Problem', *Siculorum Gymnasium* 38(1985), 209-228.
- Segal, C. P., 'Gorgias and the Psychology of the Logos', *Harvard Studies in Classical Philology* 66(1962), 99-155.
- Untersteiner, M., *The Sophists*, tr. K. Freeman, Basil Blackwell, 1954.
- Untersteiner, M., *I Sofisti* (2nd ed.), Vol.1, Lampugnani Nigri, 1967.
- Verdenius, W. J., 'Gorgias' Doctrine of Deception', *The Sophists and their Legacy*, G. B. Kerferd(ed.), Franz Steiner, 1981, 116-128.
- Versenyi, L., *Socratic Humanism*, Yale U. P., 1963.
- Wardy, R., *The Birth of Rhetoric: Gorgias, Plato and their Successors*, Routledge, 1996.
- 木下昌巳「ゴルギアスの弁論的作品—解釈の方法—」,『西洋古典学研究』45(1997), 61-71.
- 中澤務「ゴルギアスの認識・言語批判」,『関西大学文学論集』62-2(2012), 35-59.
- 納富信留『ソフィストとは誰か?』, 人文書院, 2006.

注

- 1) しかし、彼の弁論術の理論書と目される書物 (τέχνη) は、わずかな断片しか残存しておらず (DK12, 13, 14), われわれはその理論を断片的に知ることしかできない。
- 2) 中澤[2012].
- 3) 多くの研究者は『〈あらぬもの〉について、あるいは自然について』の中にゴルギアス自身の懐疑主義を読み込み、それを『ヘレネへの賛辞』の解釈に反映させようとする。しかし、木下[1997]が批判している通り、そのような解釈は不適切である。
- 4) この作品は、日本語では『ヘレネ頌』と訳されることが多いが、この論文では『ヘレネへの賛辞』と訳すことにする。理由は次の二つである。①「頌」は、現代ではそれほど一般的に使われる言葉とはいえないこと。②「エンコミオン」は、原文の最後の一文に登場する「エンコミオン」を受けたものであり、同じ語にすることが望ましいこと。(他の日本語訳では、例えば「頌歌」と訳されていて、表題と一致していない。)
- 5) cf. 中澤[2012]54-55.

- 6) 『ヘレネへの賛辞』が真作であることは、かつては疑われることも多かったが、近年では、おおむね彼の真作と認められている（cf. Untersteiner[1967]163 n.54 (= Untersteiner[1954] 95 n.54)）。なお、これらの著作の執筆年代については、研究者によってばらつきがあり、確定していない（cf. Untersteiner[1967]163-4 n.59 (= Untersteiner[1954] 99 n.59)）。Guthrieは、エウリピデスの『トロアデス』914-65行におけるヘレネについてのヘカベの発言は『ヘレネへの賛辞』の影響を受けていると主張している（Guthrie[1971] 192 n.2）。これが正しいとしたら、執筆はその上演（B.C.415）以前であることになるが、確かな証拠とはいえないように思われる。
- 7) エウリピデスの『ヘレネ』は、ヘレネ本人は実はエジプトにいて、トロイアへ行ったのはその幻であったという説を下敷きにしているが、これは当時流布していた説であり、ヘレネ擁護の一種と見なすことができるだろう（cf. MacDowell[1982]12）。また、プラトン『パイドロス』（243a）は、詩人ステシコロスがヘレネのことを悪く言ったために、神罰で視力を失ってしまったが、トロイアに行ったのはその幻であったと訂正したところ、視力を取り戻したというエピソードを伝えている。
- 8) 『ヘレネへの賛辞』を伝えるのは二つの写本系統（AとX）のみである。『パラメデスの弁明』と同様に、テキストの脱落や破損が多く存在し、その再構成は、校訂者によってかなりの差異がみられる。本論では、現在最も質の高い校訂の一つである Buchheim[2012]を使用した。ここでのテキストと解釈は、基本的に彼の校訂と独訳および注釈に従っている。その他、代表的なものとして、Immisch[1927], MacDowell[1982]などを挙げるができる。
- 9) [12]のこの部分まで、テキストの損傷が激しく、原文では意味が通らない。ここでの訳は、Buchheim[2012]の復元案に従う。
- 10) τοὺς ἀναγκαίους διὰ λόγων ἀγῶναςは解釈の難しい言葉であるが、Buchheim[2012]に従い、法廷だけでなく、議会における政治的論争も含まれると解釈する。また、ἀναγκαίουςは、法廷において弁論の内容が強制される（MacDowell[1982] 36）ということではなく、論争の論理的必然性（説得力）への言及であると解釈する。cf. Verdenius[1981]117 n.9.
- 11) パリスのこと。
- 12) 冒頭の[1]で述べられた、「男性であれ女性であれ、言葉であれ行動であれ、国であれものであれ、それが賞賛に値するものであるなら、賞賛をもってほめたたえるべきであるが、賞賛に値しないものであるなら、非難しなければならない」という法のこと。
- 13) Barnes[1982]523-530は、ゴルギアスの議論が不十分であると批判し、ヘレネに責任を問う余地が残されていると主張している。しかし、少なくとも①②に関しては、常識的にヘレネの責任は回避しうるのではないかと思われる。
- 14) cf. 納富[2006]149.
- 15) 『ヘレネへの賛辞』が持つこの特徴は、Adkins[1983]122-3によって指摘された重要な特徴である。ただし、Adkinsは、これはゴルギアスの誤りであり、ゴルギアス本人はその点に気づいていないと考えている。しかし、この後の議論で明らかになるように、そう

ではなく、ゴルギアスは目的をもってこのような特徴のある議論を展開していると考えられる。

- 16) Adkins[1983]は、両者の大きな違いから、ゴルギアスの側の一貫した思想性の欠如を読み取ろうとした。しかし、われわれのように、両作品の執筆目的がそもそも異なるのだと解釈すれば、ゴルギアスに責任を帰する必要はなくなる。
- 17) MacDowell[1982]40, Adkins[1983]120など。
- 18) Duncan[1938] 405, Versenyi[1963]44, Poulakos[1983]4, Wardy[1996]28など。
- 19) ただし、筆者は、ヘレネがロゴスと同一視されているとする Poulakos[1983]のような立場には立たない。なぜなら、ヘレネはあくまでも、ロゴスの力に従順に従う人間として賞賛されているからである。
- 20) ゴルギアスの著作の表題が、ゴルギアス自身の命名によるものである保証はない。しかし、この表題が、ゴルギアス自身の最後の言葉「わたしは、この作品を、一方ではヘレネへの賛辞として、…書こうと欲した」に由来することは、明らかであると思う。
- 21) Isocrates, *Helene* 14.
- 22) MacDowell[1982]12. (さらに, Untersteiner[1967]198 n.4 (= Untersteiner[1954]125 n.4。))
- 23) 筆者の解釈は、Versenyi[1963]43-44の説明に近い。彼は、ゴルギアスの真の目的はヘレネの擁護ではなく、彼女は議論のための単なる口実に過ぎないとし、その意味で、この作品は、お遊び的要素の強いものだとしている。なお、Poulakos[1983] 7は、「楽しみ」という発言が、ゴルギアスに対して投げかけられると予想される批判者からの攻撃の危険を回避するためのものだと述べている。おそらく、そのような自己防御的な意図があったことも十分に考えられるが、筆者は、それよりも、自分の議論の性格を示すという目的のほうが重要だったと考える。
- 24) 心を身体と類比的に捉え、医術との関係を重視するのは、この時代に共通の発想であり、デモクリトスにも同様の傾向が見られる(cf. Segal[1962]104-5)。さらに、同様の傾向は、プロタゴラスにも見られる。
- 25) Segal[1962]104-109.
- 26) cf. Untersteiner[1967]298 (= Untersteiner[1954]192).
- 27) cf. Romilly[1975] ch.1.
- 28) この発言には、弁論術の言論が虚偽であるという含意は存在しない。なぜなら、ここで対比されているのは、弁論の技術を使わずに提示される、真実であっても説得力を欠いた言論であると考えられるからである。
- 29) Verdenius[1981]116, cf. Buchheim[2012]198.
- 30) cf. Jarratt[1998]56.
- 31) Rosenmeyer[1955]229. 木下[1997]は、『ヘレネへの賛辞』において、人間が知識を獲得し、それを言葉によって伝える可能性は否定されていないと主張している(65)。しかし、それは、ゴルギアスが『〈あらぬもの〉』について、あるいは自然について』で批判してい

る考え方である。ゴルギアス自身の認識論は、これとは異なり、そもそも「信念（ドクサ）－知識」という哲学的対立図式を前提していないと考えるのが妥当である。

- 32) Verdenius[1981]124,127は、ゴルギアスのアパテー概念はエレア派からの借用であり、エレア派のロゴス概念の改変であると考えているが、ゴルギアスとエレア派の関係を考えれば、もっともらしい主張といえる。
- 33) cf. MacDowell[1982] 28, McComiskey[2002]38-39, 木下[1997]63-64, 納富[2006]170-174.
- 34) Barnes[1982]525.
- 35) Saunders[1985]214.
- 36) ゴルギアスは、①④の場合には、誰にも責任を問えないと考えていたと思われる。①では、神々のような超自然的な力に責任があることになるが、彼は、そのような力は人間世界の倫理を超越しているがゆえに、責任を問うことは不可能だと考えているように思われる。また、④については、彼は愛（エロス）を「人間の病気」と位置づけている（[19]）。それゆえ、重い精神病と診断された犯罪者が免責されることがあるように、ゴルギアスは、この場合には、誰にも責任を問えないと考えていたと思われる。（なお、④のケースは、原因が精神の病気であるような特殊なケースである。それゆえ、納富[2006]164-165の主張するように、ゴルギアスが④のケースを③の言論にまで拡張して、言論の免責をも目論んでいるとすることはできない。）
- 37) これは、ゴルギアスが徳の教師であることを否定し、自分の仕事を弁論術の教育に限定していたという事実（Plato *Meno*, 95c）と矛盾するものではない。弁論術の目的は、説得を通して社会的正義を実現することであり、弁論術の教育は、そのような社会的正義に触れなければ成立しないと考えられるからである。そのような、弁論術による論争を通して実現される、ノモスとしての社会的正義の存在を、彼は否定しないであろう。
- 38) 『ゴルギアス』において、プラトンがゴルギアスの理論を正当に批判しているのか否かをめぐっては、さまざまな問題がある。プラトンの批判は、プラトン自身の哲学の枠組からなされている側面も強く、筆者は、プラトンの理解がすべて正当であるというつもりはない。cf. McComiskey[2002]17-31.